

## 歴博 くらしの植物苑だより

第123回くらしの植物苑観察会 6月27日(土)

### 樹をみて絵図を読む

青山宏夫(本館研究部歴史研究系)

日本の中世には、荘園や村などを描いた絵図が数多く作られました。絵図とは、彩色をほどこして景観を絵画的に描いた地図のことです。歴博の第2展示室には、その主要なものが複製されて、定期的に入れ替えながら、常時、展示されています。

これらの絵図のほとんどには樹木が描かれていますが、これには大きく分けて2種類の表現があります。一つは、一本の独立した木として、樹種や枝振りまでもそれとわかるように描かれた木です。このように描かれた木は、付近の目印(ランドマーク)になるような特徴的な木であり、地図のなかではそこがどこであるかを示すのにたいへん重要な役割を果たしています。もう一つは、山などを表現するときに見られるものですが、同じような形式的な木々をたくさん描いて、全体で樹林を表現しているものです。

さて、樹木に注目して絵図をみた場合、近江国葛川絵図(図1)はたいへん興味深い絵図です。この絵図は、葛川(現在の滋賀県大津市の北部)とその南隣にある伊香立荘とのあいだの数次にわたる相論のうち、文保年間(1317-19年)に争われた相論の際に、葛川側によって作製されたものです。この相論は、天台修験道場明王院の霊場葛川へ、伊香立荘が山野利用のために侵入してきたことによる、いわば 聖なる世界 と 俗なる世界 との境界争いでした。この相論の文脈のなかに、樹木が巧みに位置づけられて描かれているのです。



図1 近江国葛川絵図

(文保2年〔1318〕年、96.9cm×204.1cm、国立歴史民俗博物館増複製による、原品は明王院蔵)

もともと絵図は、必ずしも現実を忠実に描写しているとは限らず、ときにはある目的のもとに誇張や省略、さらには捏造までして作製されることがあります。たとえば、この絵図の中央を直線的に流れるように描かれている大川（琵琶湖に注ぐ安曇川の上流部）は、実際には大きな屈曲部をもっています。このような表現になっているのは、これによって右岸と左岸との対比的構造を描き出し、相論を有利に展開しようという意図があったからなのです。

では、樹木はどうでしょうか。この絵図には、ほとんど全面にわたって樹木が描かれています。これらの樹木の表現をよくみると、絵図の部分によって樹木の描き方がずいぶん異なっていることに気づきます。

そこで、いまかりに、樹木の種類指標として一般に容認しうる幹と葉の形態的特徴によって、これらの樹木を分類すると、幹は直線的な「A」と曲線的な「B」、葉はベタ塗りの「1」と薄ボカシの「2」となります。これらは、それぞれ経験的に前者は針葉樹と広葉樹、後者は常緑樹と落葉樹に想定できます（図2）。

これらを組み合わせた「A1、A2、B1、B2」の4つのタイプのうち「A2」が検出されないのは、現実に葛川一帯には落葉針葉樹が存在しないことに対応し、分類の妥当性を支持しています。また、「B2」からはさらに、根元からの枝分かれの多い「C」を分類できますが、これは人による利用の進んだ萌芽林（薪炭山）とみなすことができます。極相林と考えられる「A1」は秘所瀧や三之瀧に、二次林の「C」は相論の対象となった下立山に配されています。このような樹木の配置も、葛川側が相論を有利に展開しようという意図のなかで考えることができるのです。

くらしの植物苑観察会の当日は、これらの樹木の表現に注目して葛川絵図を読み解きます。

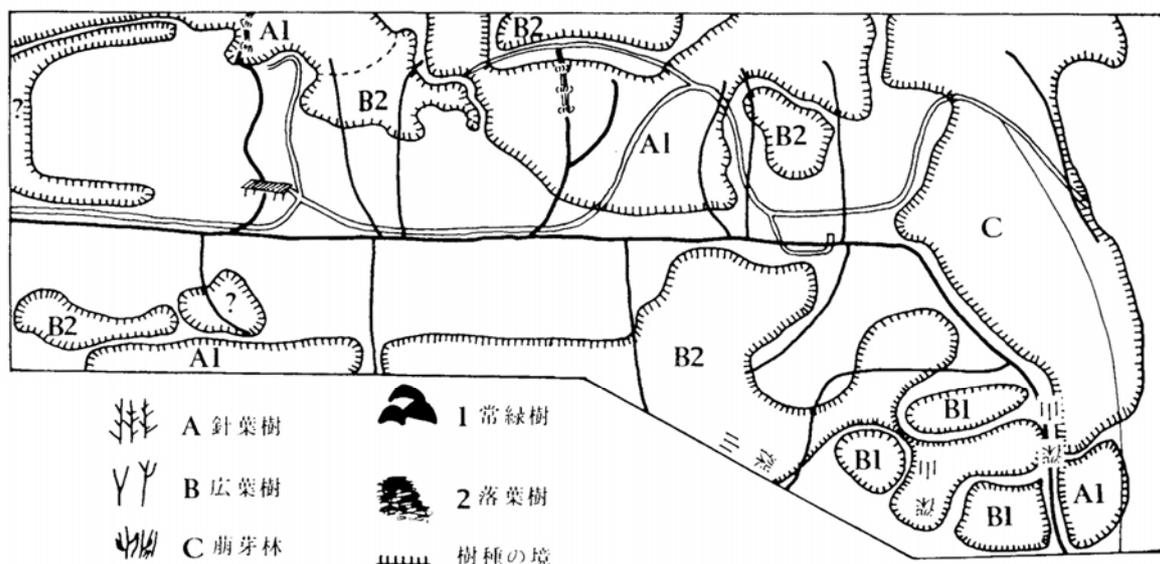


図2 葛川絵図における樹木と植生の分類（『絵図のコスモロジー（上巻）』より）

### 次回予告

第124回くらしの植物苑観察会 2009年 7月25日（土）

「日本の建築と森林文化」 辻 誠一郎（東京大学大学院）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料